

## 2025年5月18日復活節第5主日説教

使徒言行録 11章 1－18節

ヨハネの黙示録 21章 1－6節

ヨハネによる福音書 13章 31－35節

新しい聖書日課になり、福音書は以前と同じですが、使徒言行録とヨハネの黙示録の読む箇所が変わりました。

本日の使徒言行録の内容は、福音がユダヤ人だけではなく、異邦人にも広がったことを、ペトロがエルサレム教会に報告する箇所です。その現れの一つとして、食事が題材となっています。「清くない物、汚れた物」（使徒 11：7）という表現がありますが、それは律法で禁じられている食材のことです。どのような食材のことをさしているか不明ですが、ユダヤ人以外の人は普通に食べていた食材かもしれません。

教会生活や、わたしたちの国の生活では、それほど食材の禁忌を気にすることはありませんが、現在もユダヤ教、そしてイスラム教は食材に関する禁忌があります。異邦人（割礼を受けていない者）と一緒に律法で禁じられている食事をする、それを「割礼を受けている者たち」が批判しました。彼らはおそらく、キリスト者になってもユダヤ教の伝統を重んじるべきだと考える人たちでしょう。教会の最初の歩みにはそのような批判もあったということですが、異邦人とともに、律法を超えて食事をする、それは、教会がユダヤ教から独自の歩みを始めたしるしの一つです。

また本日の使徒言行録には、そのような食事とは違うしるしが記されています。それは11節以降にある聖霊による洗礼です。「その時、私は、『ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼を受ける』と言われた主の言葉を思い出しました」（使徒 11：16）とあり、ペトロがイエス様の言葉を思い出したと書かれています。これは、明らかに使徒言行録 1章5節のことです。そこには「ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって洗礼を受けるからである」とあります。洗礼について福音書において説明を語るのは、すべての福音書においては洗礼者ヨハネです（マタイ 3：11、マルコ 1：8、ルカ 3：16、ヨハネ 1：33）。使徒言行録 1章5節のみが、イエス様の言葉です。ただし、それは復活して弟子たちに現れたイエスの言葉です。使徒言行録は、教会の洗礼が聖霊によるものであること、それを復活したイエス様の言葉・教えてとして語っており、ここではペトロがそれを思い出したと語っているのです。

洗礼とは何か、それにはいろいろな説明ができますが、本日の箇所からいえば、「こうして、主イエス・キリストを信じた私たちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、私のような者が、どうして神のなさることを邪魔することができたでしょうか」（使徒 11：17）にある通り、実際には水を用いるのですが、その水による業を通して聖霊が働き、それを受けた者が、ユダヤ人、異邦人の区分に関係なく、救いの賜物に与ることです。それゆえに、洗礼は、教会に主なる神様に招かれて歩もうと

する人が、その歩みを始めるためのしるしに他ならないのです。そして、洗礼は、人間が主なる神様の救いの賜物に、平たく言えば救いに与るための教会の重要な秘儀に他ならないのです。

さて、使徒書は、ヨハネの黙示録が選ばれていますが、本日の箇所は、教会とそこに集められる人々の未来、あるいは目標について語っています。ヨハネの黙示録の20章には、有名なキリストの千年支配（黙20：1-6）、サタンの最終的な敗北（20：7-10）、最後の審判（20：11-15）があり、それら終末的な表象を受けて本日の箇所と続きます。そこにあるのは、教会に集められるキリスト者が終末時に見る世界です。それは「**また私は、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は過ぎ去り、もはや海もない**」（黙21：1）と表現されています。「新しい」のですから、この世界と同類ではないようですが、正確にはわかりません。大切なことは、人間的な考えや観点でその世界について想像することではなく、洗礼を受けて、教会に連なり、主なる神様を信頼することです。

さて、教会は、そのような人々の集まりですが、本日のヨハネ福音書は、四つの福音書の中で、もっともそこに集まる人々が何をすべきかをはっきりと語っています。ヨハネ福音書が使信として語っている事柄は、イエス様を通して主なる神様を信じて、主なる神様が与えてくださる永遠の命を受け、生きることです。そして、教会はその使信を受け入れた人々の集まりですが、その集まりは何をすべきなのか、それは、「**あなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい**」（ヨハネ13：34）とある通り、教会の中で互いに愛し合うことです。また「**互いに愛し合うならば、それによってあなたがたが私の弟子であることを、皆が知るであろう。**」（ヨハネ13：35）とある通り、それが世界に愛を示す教会の方法です。残念ながらこの方法を教会は、2000年経過しても、いまだ検討中のままです。

「たがいに愛し合うこと」、それは抽象的であり単純な戒めであるからこそ、具体化が難しい事柄であると思います。また、旧約続編のエズラ記（ラテン語）の3章7節には、「**あなたは彼に一つの戒めを与えましたが、アダムはそれを破りました。そこで、あなたはすぐにアダムとその民を死に定められました。アダムからは数えきれない民族、部族、人々とその親族が生まれました**」とあります。人間（アダム）は、たった一つの戒めすら守れなかったのです。だからこそ、エズラ記（ラテン語）では、大切なのは律法を守ることである、となるのですが、教会に集められるわたしたちは異なります。イエス様という模範があります。そして、模範であると同時に復活を通して、救いのしるしとなった方がおられます。その方を通して、「たがいに愛し合うこと」を実行していくことが大切なのです。この使命は、この世界にまことの主の平和が満ちるまで、あるいは主なる神様が終わりの時を定めるまで終わりません。しかし、わたしたち自身のために、そして、悲しみや苦しみの多い世界のために、その大切な働きを共に担う教会の一つとして、歩み続けたいと思います。